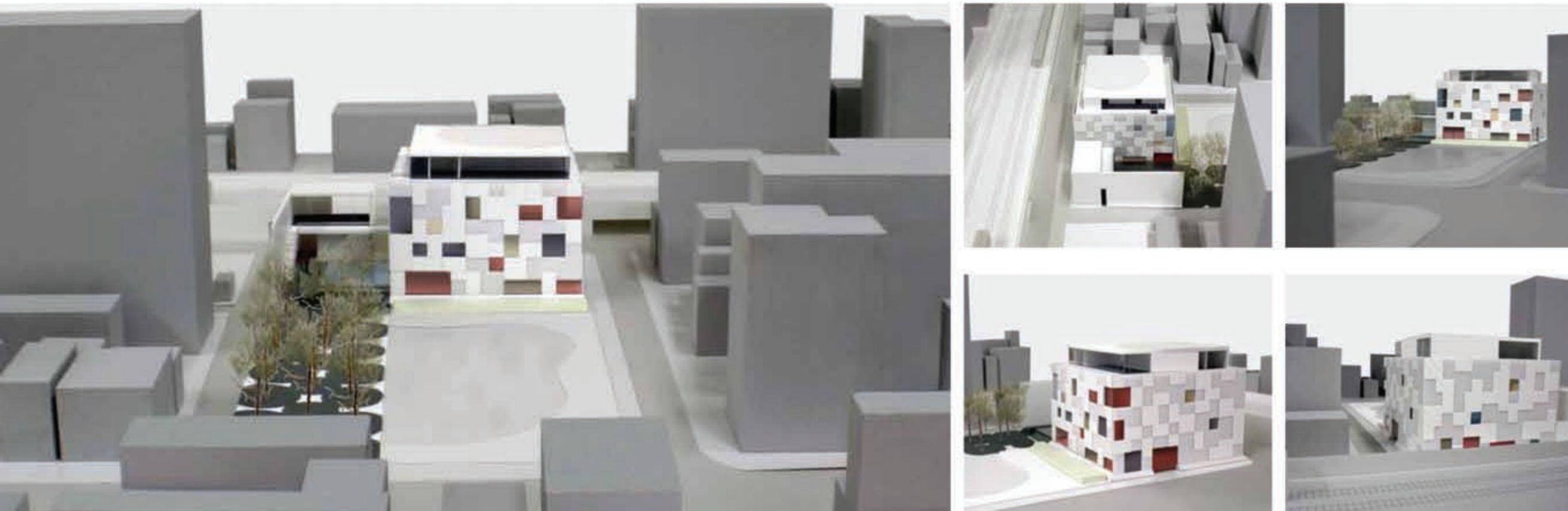


# 黄金比と江戸小紋の玉手箱

## Hokusai Institution of Sumida City



街なみの中に浮かび上がる白いランドマーク

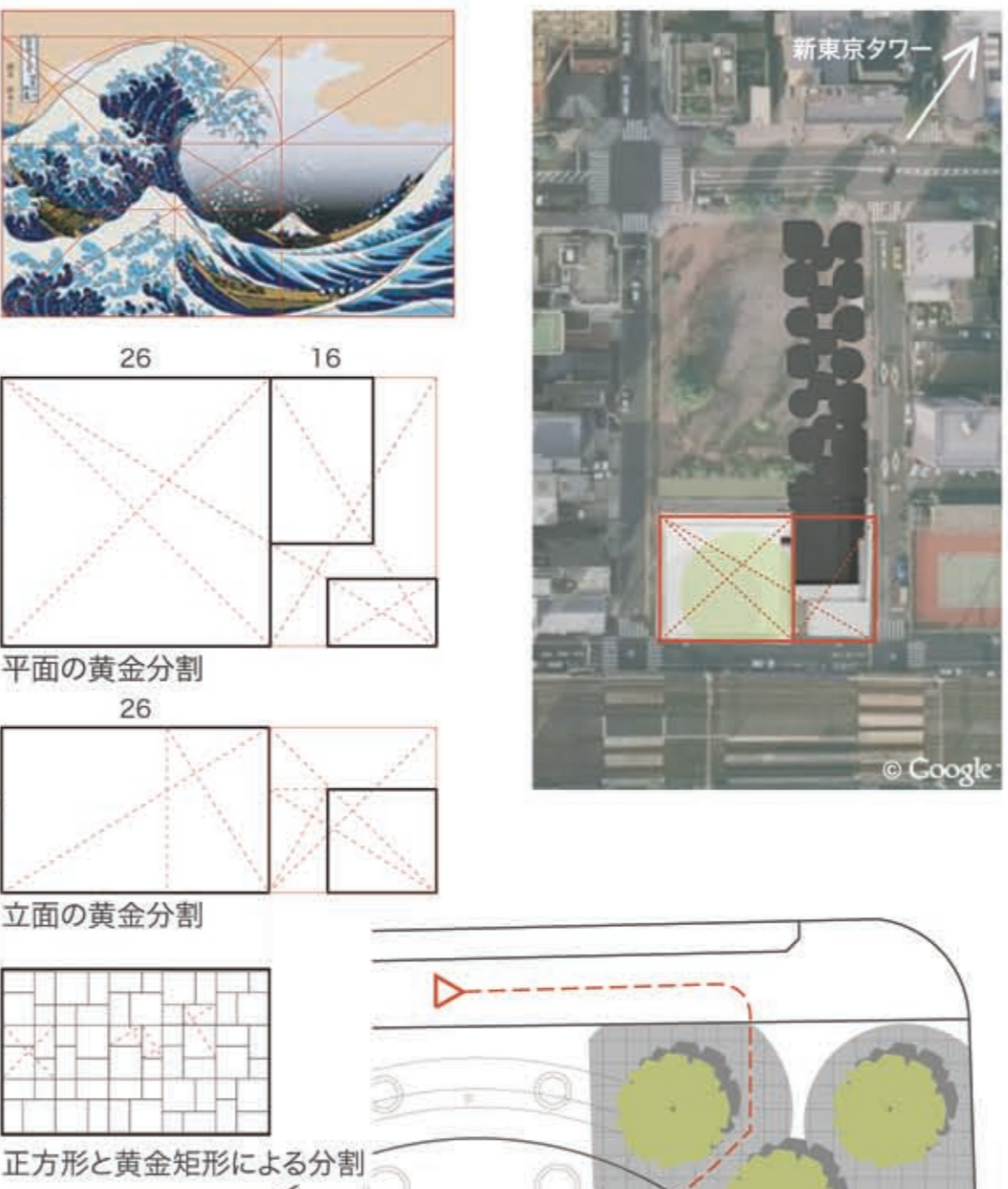


### 完璧な比例原理の建築形態

**Google Mapですぐ発見できる明快なランドマーク**  
調査研究が事業の基幹となる【インスティテューション】(研究センター)としてのたたずまいをもたせ、北東わずか1.7kmに位置する新東京タワーと視覚的に呼応する墨田区の新名所とします。

**幾何学を基にした合理的・構築的な構成**  
北斎は「ひでうぎ(定規)とぶんまわし(コンパス)をもって絵をかくの法」(略画早指図)で説いたように、正方形と円をすべての基本として、緻密な幾何学によって大胆な構成を決定していました。西洋の透視図法を取り入れ(三つわりの法)、点対称、合同三角形や黄金比・黄金分割によって構成を決定していた例が数多く指摘されています。(例: 富嶽三十六景・神奈川沖浪裏の黄金分割)

**黄金矩形・黄金分割による平面構成・立面構成**  
私たちは敷地の縦横比が、偶然にも黄金比にきわめて近いことに気がつきました。そこで、北斎が絵の構成を決定したように、私たちが正方形と黄金矩形を用いて平面と立面の構成を試みました。  
まず敷地から42m×26mの黄金矩形のフィールドを割り出し、そこから26m×26mの正方形を分割して主屋の平面形とし、残りの黄金矩形をアプローチ前庭とします。立面においても、26m×16mの黄金矩形を基本に、主屋と別棟の関係を黄金分割で決定します。ファサードも正方形と黄金矩形の組み合わせによる幾何学的分割で構成します。



### Institutionにふさわしい内部構成

1階のエントランスホールに入るとまず図書室が目に入り、窓越しに見える静かな水盤とともに研究センターとしての第一印象を作り出します。2階、3階の展示室に上がると、北側に公園や街の風景が絵のように切り取られて見えるロビーを経て、多彩な北斎世界が広がる静かな展示室に入っていきます。施設の心臓部である調査研究部門は最上階に配し、収蔵庫を中心に落ち着いて調査研究に没頭できる快適な環境を確保します。一般の人たちもこの階へ上がってくると、最先端の研究の場に接することができます。多目的ホールや講座室はアクセスしやすく、階高の高い地下1階に配置します。  
カフェは前庭に面する別棟に配し、美術館の開館時間にかかわらず独立して営業でき、公園に連続した、人々に開放された場とします。

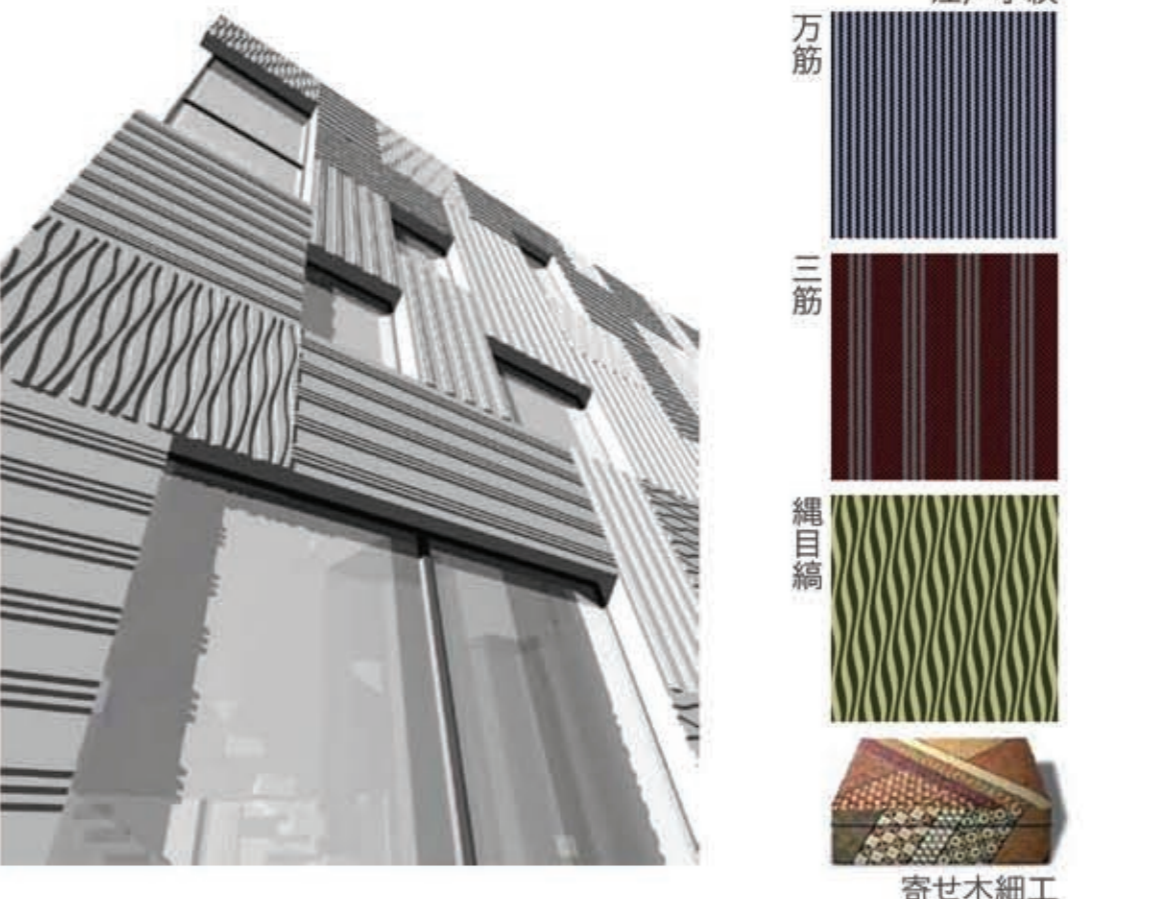


### 江戸小紋の玉手箱

**あらゆる領域を制覇した絵の巨人の世界を包み込む**  
肉筆画にも木版画(錦絵・狂歌絵本・読本挿絵・絵手本)にも通じ、役者絵・美人画・人物画から風景画・花鳥画・芝居絵に至るまで、あらゆる分野を制覇した北斎の偉業を讃えたいと考えます。  
その豊富な世界を内包する建物として、緻密な幾何学で組み上げられた寄木細工のような玉手箱を提案します。それ自身は白一色で周囲の日常的な風景から毅然として立ち上がり、その中にたくさんの驚きが集まった玉手箱です。

**日常世界とつながる開口をもつ玉手箱**  
玉手箱は密閉されているのではなく、エントランスや各階ロビーのあちこちに額縁のような窓開口が開いていて、周囲の日常世界を一幅の絵のように切り取ります。それはあたかも北斎が江戸の庶民のなげない日常生活を愛して描きこんだように、日常世界を新たな視点で見直す美術館体験をつくりだします。街や公園から見ても、この美術館は閉鎖的な箱ではなく、内部の多彩な世界が垣間見え、驚きの世界へ誘い、街と親しくつながる美術館の表情をつくりだします。

**江戸小紋を身に纏うファサード**  
北斎の描いた江戸の人々のお洒落だった江戸小紋をモチーフとして、正方形と黄金矩形に分割されたホワイトコンクリートのPC板一つ一つの外壁に刻み込み、江戸後期の粋なグラフィックデザインを現代に再現します。また江戸小紋の柄の選択は区民参加のアンケートによって決めます。  
東西南北4面を裏表なくこのファサードで被い、総武線の車窓から毎日見る何十万の人たちからも、この建物のアイデンティティが一目で視認できます。

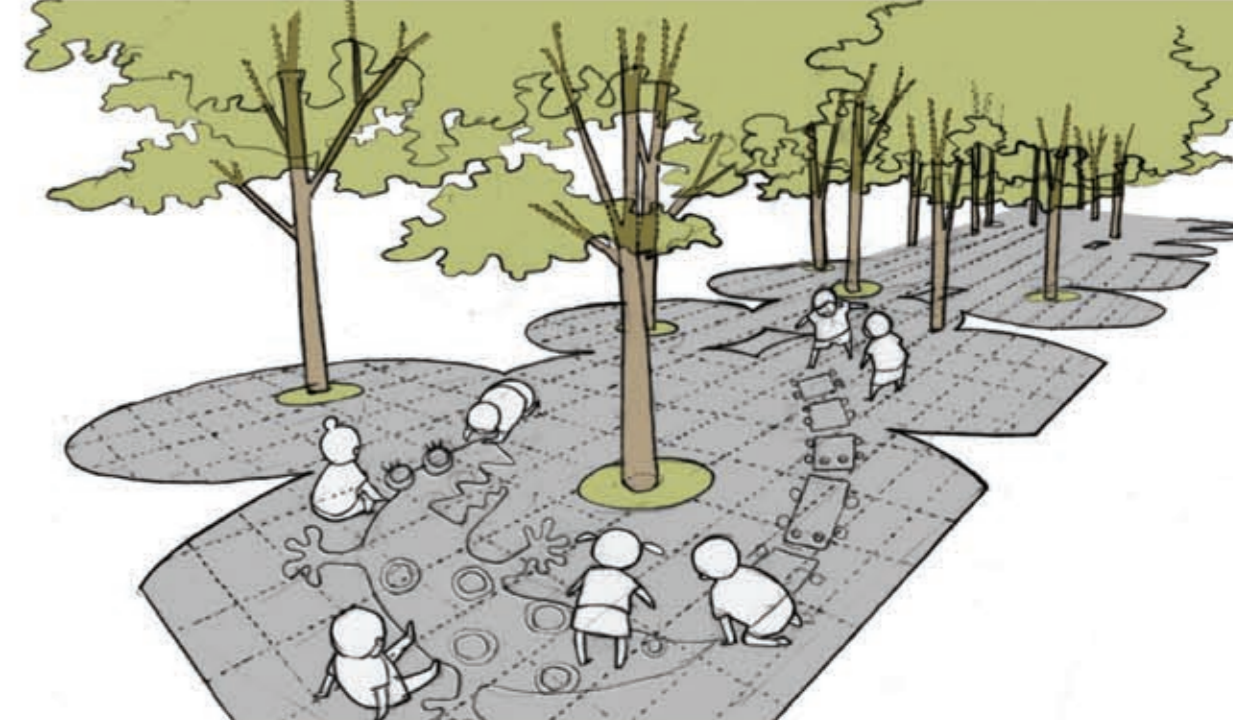
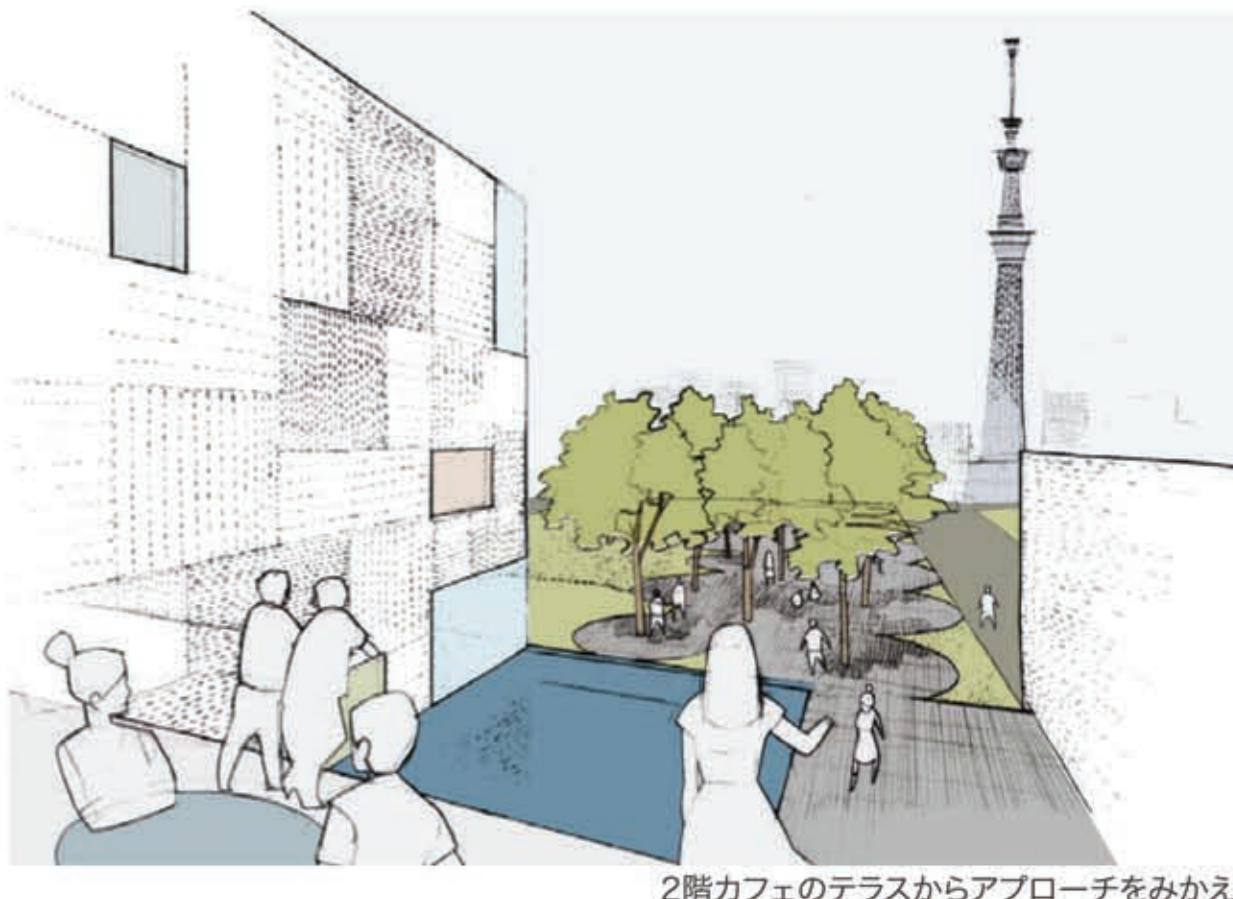


### 日常世界から北斎世界へ導くシークエンス

**「けんけんば」の遊歩道**  
北斎通りから北斎館までのアプローチとして、緑町公園の東端・幅16mを遊歩道として整備することを提案します。そこは、緑町公園の一部でもあり、こどもたちがお絵描きできる黒のストリートで床を仕上げ、「ふうのき」を列植して、こどもたちが木のまわりで楽しく遊ぶことのできる場所とします。

**基壇のうえの玉手箱**  
建物を高さ90cmの基壇の上に載せ、アプローチから基壇に上り、水盤を迂回して入り口に達する回遊的な空間のシークエンスによって、日常世界からだいたいに北斎世界へ人々を導きます。基壇は、海抜が低く地下水位の高いこの敷地において、集中豪雨による出水、浸水や万が一の場合の洪水から北斎作品を守るための防災機能も合わせ持ちます。

**北斎世界を堪能できる照明計画**  
原画を保護することを最重視しながら、楽しく北斎世界にひたれる場所をつくりだすために照明計画を考えます。  
展示室の照明は、展示品保護のために制御しやすい人工照明を原則とします。原画を見せる場所では50lx、レプリカを見せる場所では200~300lx、というように、展示作品の損傷係数に応じた適切な照度をきめ細かく設定します。50lxの低照度でも快適に見えるために暗順応機能を考慮し、更に色温度を下げるなどの工夫を行います。一方、図書室など明るい照度が必要な場所では、鉛直面300lx、机上で500lxを確保して快適に作業できる環境を整えます。  
閉館後も、アプローチ遊歩道の軸線を明るく快適で安全な樹間の空間とし、美術館建物を下から柔らかく滑らかに照らしあげるような外観照明を計画します。



**美術品を守るプレキャストコンクリート壁構造**  
美術品保護のために、アルカリの発散を最小に抑えられるPC(プレキャストコンクリート)を採用し、防音・耐火・耐震を考慮してコンクリートによる強固な外壁による構造を採用します。  
PC壁ユニット方式はデザインコンセプトと一致するうえ、生産性を高め、経済的・工期的に有利となります。床も高強度PC構造にすることで、構造部材寸法を抑えながらスパンの長いフレキシブルな展示空間が得られます。

